

第32回「大阪の消防大賞」受賞者

消防職員の部

| 所属 | 受賞者 | 功績概要 | 要 |
|-----------------------|-------------------|---|---|
| 摂津市 消防本部 | 警防第2課 前田 真 氏 | 平成28年5月13日16時45分頃、摂津市内で発生した火災事案。 非番日に自宅で休養していたところ、激しい犬の鳴き声で、近くの旧家における火災を発見。近隣住民と協力し、消火栓格納箱にある資機材を使用し初期消火活動を行い、狭隘道路に囲まれ消防活動が難しい地域であったにもかかわらず、最小限の被害で止めることができたもの。 | |
| 大東四條畷 消防本部 | 四條畷消防署 新井 一平 氏 | 平成28年9月19日21時00分頃、休日に電車に乗った際、隣の車両で心肺停止状態となった女性に対し、バイスタンダーとして周囲の乗客と連携し、119番通報、心肺蘇生などの救命活動を開始。その後、到着した救急隊員と活動した結果、傷病者は、搬送途上に心配機能が回復、病院で意識が回復し、その後社会復帰することができたもの。 | |
| 東大阪市 消防局 | 中消防署 (8人) | 平成28年8月1日6時2分覚知、東大阪市内において発生した人命救助事案。 住宅火災の通報により出場した消防隊は、黒煙が噴出する中、室内侵入し、2階で逃げ遅れ倒れていた要救助者を発見。消防隊、救助隊が意思統一した活動により、要救助者を救出できたもの。 | |
| 枚方寝屋川 消防組合 消防本部 | 警防部警防課 (7人) | 平成27年12月29日19時43分頃、共同住宅の2階部分において出火した建物火災において、死者が発生し、火災原因はリコール対象製品である石油ストーブと断定した。 その後製造販売メーカーに、今後のリコール製品に対する改修と市民への広報について対策を強く訴え、さらに消防からも類似火災の防止に向け力を注いだところ、メーカーが速やかにマスコミ対応を実施。テレビや新聞記事となったことから、市民の関心が高くなり、約2万件以上のリコール対象製品を発見するに至り、火災を未然に防ぐことに大きく貢献できたもの。 | |
| 大阪市 消防局 | 西成消防署消防署 (38人) | 平成29年1月26日16時29分覚知、共同住宅において発生した火災において、急激に拡大する火煙に逃げ場を失い、救助を求める救助者に対し、出場消防隊が相互に協力し迅速に対応したことから、7名の要救助者を救出したもの。 本建物は構造が複雑で耐火性能がぜい弱な部分がある上、要援護者が多数居住する建物で、一度火災が発生すると火災防ぎょ活動が非常に困難であるとして警防計画を樹立している対象物であったが、建物内に逃げ遅れた要救助者がいないかどうか関係者に早期に聴取し、出場隊のみならず予防担当、区役所とも連携し、日ごろ培っていた緊密な連携を生かし、活動することができた結果、被害を最小限に止めることができたもの。 | |

消防団員の部

| 所 属 | 受 賞 者 | 功 績 | 概 要 |
|------------|-----------------|---|-----|
| 豊中市 消防団 | 副分団長 田中 克彦 氏 | <p>平成28年2月16日12時12分頃、トレーニング施設において、エアロバイクで運動中の50歳くらいの男性が、突然倒れた。その場に居合わせた団員は、即座に心肺蘇生のため胸骨圧迫を開始。その後、施設職員が持ってきたAEDを利用し除細動を行ったところ、直後に病者の体動を確認。ほどなくして救急隊が到着するまでに男性の意識は完全に回復、言葉を交わせるまで回復し、その後、後遺症もなく社会復帰に至ったもの。</p> <p>本団員は、平成15年4月1日より消防団に所属しており、日々努力を惜しまず消防団の活性化に尽力し、積極的、意欲的に訓練や消防団活動に取り組んでおり、正に消防団員としての鑑であるもの。</p> | |
| 吹田市 消防団 | | <p>吹田市消防団は、地域の安心・安全を守るため、団長以下183名の消防団員が郷土愛護の精神のもと、複雑多様化する各種災害や地域住民のニーズに的確に対応できるよう、更なる資質向上と団員の意識改革に取り組んでいる。</p> <p>昼夜を問わず災害活動に従事するのはもちろんのこと、吹田市消防団事業計画のもと、各分団は管轄地域の状況に応じた課題等を検討し精力的に消防訓練を行っている。傷病者へ高度な処置が行えるようAEDの取扱いを重点とする普通救命講習を受講、昨年度からは応急手当普及員講習を受講するなど、消防団員としてさらにレベルアップをはかるべく、積極的に活動している。</p> | |
| 交野市 消防団 | | <p>平成28年11月11日17時39分、火災発生の通報により消防団が召集。山林内で2階建住宅が延焼し、先着の消防隊は消火活動に従事していたが、活動は困難を窮めていた。そこで消防団長と消防隊の現場責任者が連携を図り、消火活動に従事した。現場までは急勾配があり、また、水利からの距離が500mと離れていたものの消防団員は一致団結し、消火及び延焼防止活動を行った。</p> <p>本火災は焼損面積が広く、山林に囲まれた建物火災という悪条件の中で、鎮火まで約6時間を要する活動となったが、付近山林に延焼拡大することなく被害を出火建物だけに抑えることが出来たことは、定期的に全分団で山林内中継訓練を実施し、各隊の連携が図れた訓練の賜物である。</p> | |